に近く全縁であつて時にきれ込が出來ても鋸歯とするには大きすぎる。針も別に特別の着色がなかつたと思ふ，クスドイゲの葉は上の記事と一致するし又針は莖と同一色で赭赤色をして居て目立つ。してみるとツンベルグ氏のソンノイゲの内容はクスドイゲではないか。これはツ氏の聞きまちがいか，日本人の教へちがいか，そうでなければ長崎にはソンノイゲの異名もあつたのであらうか。なほソンノイゲの語源はまだわからないが，上記の如きクスドイゲだとするとわかるやうだ。それはソンはソニの轉でソはマソホノスヽキのソであり，ソニトリのソであつて，ソホ又はソホニ即ち染める土，色土から赤土色をさし，赤味のある土色の針のある植物の意でソホニノイゲからソンノイゲとなつたやうに考へられるからである。

○ノササゲの地下莖（前川文夫）

ノササゲ（*Dumasia truncata* S. et Z.）は中々澁味のある山草である。多年生で年々蔓が延びてはすつきりした葉をつけ，蒼碧色の粉を吹いた可愛らしい豆が出來る。必要があつてこの種子を播いたことがあるが，副産物として地下莖の面白い伸び方がわかつたのでこゝに記す。從來はたゞ多年生とのみ記してあるが近い屬のクズやホドイモとは多年生の形式が違つて居るのである。種子は相模神武寺で昭和20年冬採集，これを翌年春に四寸鉢に淺く播いた。發芽の際には子葉は種皮から出ない，即ち地下生である。地上部がのびはじめた頃から間もなく子葉腋から夫々一本の徑2mm許りの紐狀の地下莖が伸び出す。白くて一見軟かさうだが存外軟骨質であり，莖面には鱗片葉を疎に互生する。その一個は往々合着もするが多くは托葉2個分から成つて居る。この地下莖は垂直に近い傾斜で鉢の底の方に向つて居た。地上部は花をつけるに至らずに冬を迎へて枯れた。さて本年（22年）春になつても一向芽が出ないので，一年生の草かと疑つたりしたが，6月下旬になつてやつと芽が出て來た。そこで鉢をひつくりかへして見たところ，土の中には枯れた地下莖の殘りが僅かにあるだけで鉢の底に太い(徑2mm位)如何にも蛔蟲が居るやうな印象を持つた地下莖がはりついて居る。分枝したものもありその枝の先は昨年の地下莖の先端と全く同樣な形と色とであつた。地下莖の途中から地上莖が側枝として出て直上して居るが，地下莖の兩端は共に枯れて腐つて居た。これは冬の寒さで鉢の側壁が凍つたからそれでやられたのであらう。後端は前年の急傾斜で下つて來た地下莖が鉢が小さいために底で頭をうつて止むなく急角度で曲つたことを示す形骸を殘して居た。これからみて，ノササゲでは地下莖は子葉腋から伸びる。そして20—30cmの下方迄もぐつてから横走，單軸分枝をなしてその先端は決して地上莖とはならず横走をつゞけ，後端は次第に枯れて行く2年生，即ち冬の2年生である。一方地上莖は常に側枝として出て，この部分は夏の1年生である。クズやホドイモの地上莖の少くとも下部が殘存しては枝を出す一方肥大して行く**木本的多年生**に對して，ノササゲは2年生の部分が交代繼續する**交代的多年生**であることを示す。野外では地下莖の深いために中々掘つて見る機會がないので眞相が判らないのであらう。